

# 北海道立札幌第一高等学校始末記



## 丹保 憲仁 (たんぼ のりひと)

一般財団法人北海道河川財団会長  
北海道大学名誉教授 (第15代総長)

1933年豊富町生まれ。1957年北海道大学工学部土木工学専攻大学院修士修了。1965年工学博士。1969年北海道大学教授。学生部長、工学部長を経て、北海道大学総長 (第15代1995～2001)。北海道大学名誉教授。2001年放送大学学長 (第5代2001～2007)、放送大学名誉教授。2007年北海道開拓記念館館長。2010年北海道立総合研究機構理事長 (初代2010～2018)。2008年から現職。主な公職、学術会議会員、国際水協会 (IWA) 会長、土木学会会長、国土審議会委員 (北海道部会長)、生活環境審議会委員、道総合開発審議会会長、札幌市環境審議会会長、などを務め、欧米アジアの諸大学から名誉教授、名誉博士を受ける。

今85歳の老人は、大学人、工学の研究者、水システム屋、山スキー屋、カメラ好きとしての長い人生の終末期にいる。

ここで、思い出して書こうと思っているのは、17歳の時に主体的にかかわった事からの、悔しさ、ばかばかしさ、あるレベルの識者である<sup>はず</sup>の大人の今なお改まらぬ保身と、美しからぬ身すぎ世すぎへの情けなさ、70年たった今でもなお十全には消えぬ怒りである。

## 高校2年生の秋のこと

昭和24年秋も深まったころのことである。僕たちは、北海道立札幌第一高等学校の2年生の第3学期に入ろうとしていた。僕は道立札幌一高の生徒会の議長をし

ていたと思う。やがて3年になり、生徒会執行部の一員になる。委員長は札幌師範附属小学校1年生からの旧友中西章一である。中西印刷の次男で、後にSTVであったと思うが、名コメンテーターとして市民に親しまれた人である。早世した。

日も形も忘れたが、ある日突然に道立札幌一高、二高、道立札幌女子高、市立札幌女子高 (市立一高) を廃止統合して、昭和25年度から完全小学区制、完全共学制を始めることを、北海道教育委員会は発表した。その前の年の昭和24年、札幌市立 (男子) 高校 (市立二高) を廃止して、半分ずつ道立札幌一高と二高に在校生を分割移動させたばかりである。あえて言えば、当時ランク下位の市立高校から道立の一・二高に移行するのであるから、移行生には大きな不満もなく分割が進行した様に思う。道立一高に来て喜んでいた<sup>おきなな</sup>幼馴染みも少なくない。それにしても、1年もたたぬうちに全高校の共学と完全小学区制を始めるというのだからみんなの驚きに不思議はない。教育委員会は市立 (男子) 高校から1年もたたぬ前に来たばかりの仲

間のことなど、どう考えているのだろうか。

もっとも、昭和25（1950）年度になると、最初から新制中学に入った純粋新制の男女共学の中学生が新制高校に初めて入ってくる。もし関東のある県の様に公立の女子校と男子校の分立を続けるのでなければ、自動的に新制高校1年生は共学になるはずである。僕のいた附属小（国民）学校は戦時中も男女組を4年生まで維持していた。僕の2歳下の弟の学年からが完全新制の中学生で、僕は旧制の北海道庁立札幌第一中学校に敗戦の直前に入学し、軍事教練を受けた最後の学年となったが、弟は札幌師範学校附属小学校から、新制の北海道学芸大学附属中学に進学し、新制の高等学校に進むことになる。まったくの新制育ちは昭和9年・10年生まれの子たちの世代からである。新入生の共学を全校挙げて全からしめる<sup>ため</sup>に、2年・3年の旧制中学から転じた在学<sup>を</sup>を完全地区制で分割して男女共学に持ち込むのが趣旨であったのだろうか？

## ニプロという男に見る米占領軍（CIE）の強権

その時代に北海道の教育行政に強い影響力を持っていたのが、占領軍軍政部民間情報教育局（CIE）のウインフィールド・ニプロと言う施政官（局長）であった。占領下でのフォークダンスの導入などに熱心であったことが知られている、アメリカのある地方の高校教師であったと聞いている。勘ぐれば、彼のCIEでの業績評価を高めるために、2年待って1年生が3年になればすべての高校が共学になるはずであるのを一挙に共学化しようとしたとも思う。一方で、戦後の理念過剰なフラット民主主義の占領軍（特に民生部）の体質から、一中、二中、道立高女、市立高女といったヒエラルキーの存在を壊そうとしたようにも思う。市立男子校を去年廃校にされた人のことなど、念頭にはなかったのではないかと思う。常日頃に庁立札幌第一中学（高等学校）の後塵を拝していた趣のある第二中学（高等学校）は再編成に唯一反対しなかった。教育委員会にも全く諸般の事情に配慮があった形跡はない。交渉に行った我々にS教育長はにべもなく、学校に帰って校

長先生に聞けという話である。典型的なたらい回しである。このS氏は、その後新設の高校の校長になるが、一期後輩の執行部の副委員長をしていたS君のおじさんである。世の中は狭い。

## 再編成に立ち向かった<sup>とうろう</sup>蠅<sup>おの</sup>の斧<sup>\*1</sup>の我々

当然のことながら、在校生は漸進的に共学を進めることがよいと考えていた。旧制中学3年の時に学制改革によって自動的に、第一高等学校に併設された新制中学卒業生とされて、旧制中学4年生になるはずが新制高校1年生になり、4年・5年生のみが転じた道立札幌第一高等学校なるものが短期間存在することになる。旧制中学から新制高校に切り替えられて、同年次の教科書のレベルは1学年分ほど後戻りして易しくなる。旧制中学4年から飛び級で10%ほどの上位者が、旧制高等学校・大学予科に進んでいたのだが、それもできなくなり、高校3年まで入学試験が遠のく。六三制野球ばかりがうまくなり<sup>\*2</sup>といった言葉が蔓延する。1学年上の級長・副級長などのリーダーはほとんど飛び級で北大予科などに行ってしまう、新制大学の一期生となる。そのうち、新制の道立札幌第一高校3年生になった一級上のクラスは、4年時の飛び級受験、高校3年の現役で新制大学を受け2期生となる。複数回の現役受験のあった先輩と違い、我々は3年たって初めて大学受験ができる新制3期生である。上のクラスは、中学－旧制高校飛び級組、新制高校3年からの受験と現役で2回の受験機会があり、北大で言えば旧制予科の定員400人が新制大学教養部700人に増えて浪人がほとんどいないので、3年間待機させられた我々は、先行する浪人組との競争のない割と楽な入学試験であった。

気の毒なのは我々の一期下の旧制中学最後の入学生である。彼らは戦争に負けてからの昭和21年入学なので、我々のような軍事教練はなく、庁立札幌一中の最後の新入生であるが、看板である「雪戦会」も好戦的なゲームであるとの占領軍の達しで無くなっている。作家の渡辺淳一らのクラスである。彼らは、高等学校

\* 1

自分の弱さをかえりみず、強敵に挑むこと。はかない抵抗のたとえ。

\* 2

戦後義務教育化された中学校は全員が入学できるので、新制中学生は勉強がだめな割に（軍国主義につながらない）野球だけはうまくなったという冷やかし。

2年生になるまで後輩を持たぬ最下級生を4年間続けることになる。我々20年入学組は、雪戦会の練習は散々させられたが、敗戦で中止となる。十分な練習をしないとけが人が出るほど雪戦会は厳しい札幌一中の伝統行事である。僕の北大土木時代の恩師であるO先生は雪戦会などの蛮カラが嫌で、庁立札幌二中へ進まれたと漏れ承ったことがある。

### 東西南北4公立高校発足する

20年入学、21年入学の2学年の高校生を厳密に東西南北の地区に振り割って（区割りには適当極まりない、ゲリマンダリング様<sup>\*3</sup>である）新制の共学4高校が札幌に誕生することになる。道立札幌一高、道立札幌女子高、市立札幌女子高（市立一高）の3校が反対運動を立ち上げ、道教委・米軍民生部に反対の趣旨を申し入れ、街頭で運動をする。小生は高校2年3学期には市内の高校再編成反対組織のリーダーの一人として、反対運動のため60時間欠課（学校の承認ももらった公認欠課）することとなる。後に事が終わり札幌東高校に1期生として10カ月在校し卒業するときに、文部大臣表彰（優秀奨学生）、右総代の答辞、功労賞などをいただいた。無欠席、無遅刻であったが皆勤賞だけはもらえなかった。

反対運動の末、事破れ昭和26年5月10日ころであったと思うが、東西南北の4高校が発足する。新しい4つの高校を発足させるのだから、君たちは心を新たに戦後日本のパイオニアになれとの説得であった。美辞麗句である。何とか無理やりに、自分を納得させて矛を収めたというのが、偽らざる心境である。反対運動の過程で情動的に我々を十分に理解してくださっていた、庁立札幌第一中学・道立札幌第一高等学校の実質最後の校長先生である第10代北浦延治郎先生だけが、混乱の責任を取って25年4月1日に辞職された。「北浦先生には大変なご迷惑をおかけしました。無礼な言動もあったかと思ひ先生にはただただお詫び申し上げ、身のすくむ思ひであります。北浦先生は立派な校長先生でした」。僕はのちに、大学の学生部長、学

部長、総長・学長を歴任したが、折に触れて17歳の時に誠心誠意対していただいた北浦先生を忘れることは無かった。

昭和25年5月初旬、再編成が決まり学区が決まる。当時の自宅は短期間住んでいた南6条西13丁目である。西へ2町ほど行くと市電西線があり、そこから西は西高（札幌二高）、3町ほど北に行けば北高（道立高女）、3町ほど南にいけば南高（道立一高）の校区であり、なぜか東高（市立高女）の学区だけが矩形に東から切り込んで南6西13に至っている。まさにゲリマンダリングである。最後の最後まで、北高に行くか南高に行くか西高に行くかは判らない。大方の仲間は僕が西高に行くかと踏んでいたらしく、西高に行ったら再編成賛成派をぎゃふんと言わせるなどと、わけのわからない激励をする者が少なからずいたように思う。この時から札幌の高校は、道立と市立に生徒を分配するので、道立とか市立の名を冠せず、単に札幌東高校、札幌西高校などということになる。つまらない事には配慮する教育官僚である。

5月のある日、東高に行くことが決まり、東高のJ先生が自宅においでになり、移行生の総代として、開校の辞を述べて欲しいとのことであった。弟は先に学区である東高に入学しており、まだ残留していた（4月いっぱい）市立女子高の反対運動仲間のお姉さん達から丹保君の弟として面倒を見てもらっていたようである。厳密な小学区制を敷いていたので、次の年、我が家を北19条に新築したら、弟は2年生から札幌北高に移ることとなり北高3期生として卒業した。

昭和25年ゴールデンウィーク明けに札幌東高に移行してから、高校3年生の3月の北大の入学試験が終わるまで、初代の生徒会長として新しい共学システムが適切に進行するように働く羽目になる。新しい高校を創るので、すべてリセットして頑張っしてほしいということを言われ、それを心に移行したのである。しかし、事後は東高創立60周年とか南高創立100年とか東西南北はそのオリジンを旧制時代に求め、教員のほとんどが移動しなかったことによって、新しい高校を創るという話は単なる説得用の麗句に過ぎなかったことを

\*3  
（規則などを恣意的に）改変したり、ごまかしている様。

しっかりと経験することになる。

東高等学校の小野校長先生は、包容力の大きな先生で、我々の力みをしっかりと受け止めてくださり、最大限に生徒会の自主性を認めてくださった。有り難いことである。後に北大工学部土木工学科に進んだのち先生のご息が先輩であることを知り、折に触れてご支援をいただいた。人の縁である。

校章、女子の制服の公募・決定、体育大会の応援歌、生徒会規程などを次々と定めた。夏には修学旅行を東京、鎌倉、日光などに計画する。振り返れば我々は昭和14年シナ事変の始まるころ、札幌師範の附属尋常小学校に入学する。近郊の茨戸に1年生は修学旅行(?)に行く。小学校3年生の12月8日に大東亜戦争が始まるなどで、修学旅行はなくなる。再開されたのが共学になった高校3年生の夏である。ようやくコメを持たずに旅行ができるようになった初めである。高校3年の夏は今の子なら受験勉強真最中であるが、かなりの仲間が再開した修学旅行に行った。鎌倉を見て、日光を見て、宇都宮で東北本線に乗ったが、今のような指定や修学旅行専用車などない。順番に空いた席に仲間を座らせて、生徒会委員長の僕が座れたのは盛岡を過ぎてからであった。デッキと洗面所に座って東北本線を10時間も走ったのが思い出される。

### 道立札幌第一高校とかかわりのない私立の札幌第一高校ができる

そこで、あまりうれしくない札幌第一高等学校の話の一つすることになる。道立札幌第一高等学校が25年3月末で閉校し、北浦延治郎先生が去られ、我々は第一高等学校生(3年?)のまま校舎にいて、道立札幌南高が発足する(記憶が明確ではない)。南高校の初代の校長として4月1日赴任してきたのが山口末一氏である。釧路の高校から赴任してこられたと記憶している。まだ、我々が札幌第一高等学校にいたまま、学校がなくなって札幌南高の1年生が共学で入学してきている変な一月あまりのことである。山口先生は1、2度在校の道立一高の2・3年生(?)と新入の南高(共

学)の1年生の混成の朝礼で話をされたように記憶する。道立札幌第一高等学校の学風、生徒の能力、態度に大変感銘を受けられたようで、札幌第一高校は素晴らしいと語られた。生徒会の執行部の一員として朝礼を指揮していた僕にはその辺の感じがよく伝わってきた。5月に我々2、3年生は、再編成で東西南北に散ることになる。

時が過ぎて、昭和33年希望学園札幌第一高等学校なるものが認可創立される。創立者は前記の山口末一先生である。たった1カ月垣間見ただけの北海道立札幌第一高等学校の校風に惚れたのか、名前を剽窃したのか理解に苦しむところではある。戦時中、英語教育をやめてしまった市内の中学・女学校にあって、旧制北海道庁立札幌第一中学校だけは、英語は世界の共通語であると、安延三樹太校長先生の英断でやめなかった。8月15日の敗戦まで、我々昭和20年入学の1年生は、教科書を手作りし辞書を使い回し時々援農に出ながらも、かなりの学習を続けることができた。札幌一中は北海道の核となる俊秀が雪戦会で鍛えた堅忍不拔の精神を持ち続けた学校である。安延先生は戦後藤女子大学の学長になられる。

我々の道立札幌第一高等学校の名をあっさりと盗用したかのごとき、山口末一氏にはいささかのネガティブな感慨があるが、世の中は面倒なものだ。僕の父親が、道立高女から新制中学の創設で市内の中学をいくつか経たのち、定年後、あろうことか札幌第一高等学校で昭和36年に創設された航空工学科の主任として働くことになった。僕が北大の助教授時代にフロリダ大学に研究に行っていたころのことである。

このいささつが、なぜに札幌第一高等学校があって、第二高等学校がないかの理由でもあるが、近頃は野球などの運動部も大活躍をしているようである。学業のレベルでは本家の北海道立札幌第一高等学校にはまだまだ及ばないように思うが、月日の流れと諸般の事情を考へて、剽窃もまた仕方がなかった世の成り行きの一つかと渋い思いを持ちつつ、僕の学校とは異なる札幌第一高校の日々を見ている老人の心境である。現札幌第一高等学校の諸君の健闘を祈ります。

※ 第4回は2019年2月号の予定です。

